

『すべてが栄養』

もういやだという気持ちになり、何もかも投げ出したいと思ったことことは、人は誰しも経験があるのではないのでしょうか。

今回のコラムでは、苦しみを栄養にし、後に花を咲かせた樋口一葉の話について考えてみたいと思います。

樋口一葉は明治5年の生まれです。

明治22年に一葉の父（則義）が亡くなり、母と妹の面倒をみるため、小説を書いてその原稿料で暮らしをたてようと決心したのは一葉が18歳の時でした。

そこで、当時新聞に小説を書いている人（半井桃水）に書き方を教わりに行きました。はじめは「女が小説を書くなんて」と断られましたが、何度も頼んでやっと教わることができました。

明治25年、雑誌「武蔵野」に発表した小説「闇桜」が一葉の処女作となり、それが好評を博したことにより、一葉は小説は「人間の真情」を書くことだと気づきます。しかし、それがわかった一葉でしたが、それ以後小説が書けなくなってしまったのです。

書くことによる収入がなくなってしまった一葉は相変わらずお金がなく、貧乏な生活が続きます。駄菓子屋、歌の塾の手伝い、手紙の代筆、逃げ出してきた遊郭の女の人をかくまうなど、ありとあらゆる経験をし、死にたいと思うこともあったそうです。

これらの経験をもとに「にぎりえ」を書きました。これが評判を呼びました。

森鷗外は「人間を書いていてすばらしい」と絶賛しました。その後、一葉の代表作として知られる名作「たけくらべ」も生まれました。

明治29年になってから、樋口一葉の健康は急速に衰え、肺結核のため11月23日に24歳6か月の生涯をとじました。

一葉が小説を執筆したのはわずか5年間ほどで、作品数も約20編ほどでした。特に明治27年頃から亡くなる年の明治29年のはじめまでの1年4カ月ほどの期間に集中して名作といわれる作品が執筆されています。一葉の小説は、明治という厳しい時代に生きる

女性の悲しみを切実に訴え、今の時代にあっても読者の胸を打つ作品が多いといわれています。

樋口一葉について瀬戸内寂聴さんは、「作家は、貧乏も失敗もいやな経験も皆財産、書くときの栄養なのです。一葉もそれを肥やしにして、名作が生まれました。」と『そのとき歴史が動いた』（NHK）というテレビ番組で評していました。

私たちの生活も、いつも楽しいことばかりとは限りません。いやなこと、つらいこともあります。しかし、それが、自らの栄養となっていることは少なくありません。普段はなかなかそのことに気づかずに困難を乗り越えていることが多いのですが、後になってから考えてみるとその経験があったからよかったのかなと思うことがあります。

子どもたちにも、心が折れそうになったりくじけそうになったりしたとき、すべては栄養になるという発想に切り替え、前向きに考えていてもらいたいものです。